The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	始原的布の世界を発掘『アフリカの布ーサハラ以南の織機・その技術的考察ー』井関和代　河出書房新社 2000年
Author(s)	横川, 公子
Citation	デザイン理論. 2001, 40, p. 104-106
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53131
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

始原的布の世界を発掘
『アフリカの布 ── サハラ以南の織機・その技術的考察 ──』
井関和代　河出書房新社　2000年

横川公子／武庫川女子大学

本書は著者の20年余りにわたる染織研究の集大成である。氏は本書で西部・西部中央アフリカの織機と織りの技術に関する実態調査と，文献の渉猟による歴史的・地理的位置づけを精力的に推考されている。本書における著者の視点は，あとがきにおいて「本書に記述した織機に認められる過渡期的部位や織師の作業の観察は，あくまで実制作という立場からの営為と推考であり，何らの考古学的根拠に基づかないもの」で，そういう論考を「無謀ともいえる試み」であるとも述べておられ，この点に氏の独自の視点があることが示唆される。6章で構成された内容は，章立ての順番に紹介すると次のようになる。

第1章　繊維素材
第2章　始原的布〈樹皮布〉
第3章　始原的布〈ラフィア布〉
第4章　手織（原始）機の構造とその分類
第5章　手織〈足踏み式機〉の構造とその分類
第6章　足踏み式機の分布と，その考察

本書でいう手織りとは織師の織る布であり，しばしば「織師集団」と記述される専業の職能集団に属する人々によって生産される。今日アフリカにおいても機械生産の品物が入手可能な状況にあって，なお継承される手織りは，観光土産のように生計の糧とされるものだけではなく，人間の内面的な世界のこだわりと充足の問題に直ちに結びつく。始原的織布として取り上げられる「樹皮布」（第2章）や「ラフィア布」（第3章）は，遺体を包む「埋葬用の装束」であり，「祖霊の布」であると同時に「王の君臨する場でダンスに付けるスカート用や儀礼用の手の込んだ華美な衣裳」となっている（クバ族）。何よりもそれは彼らにとって「栄えある埋葬用の装束」だという。さらにこの着ることに付加される意味は「樹皮布」や「ラフィア布」の機能に留まらず，10㎝前後の「細巾木綿布」に集約される西アフリカの代表的・伝統的な織布においても指摘されてきた。氏の観察によっても製織の過程や用途のうえで同様な事情や機能が報告される（第6章）。

こうした布と衣服の原型を想わせる現実は，機械生産による染織品と簡単には取り替えられないのだ。「栄えある埋葬用の装束」という表現には，人生の総決算としての晴れ姿を飾る気負いも見え隠れする。筆者には大宝・養老の衣服令や明治維新後の改正で制度上の衣服が唐風やヨーロッパ式に切り替えられたなかで，神事に際しての天皇の着衣として帛衣祭服に衣冠・束帯が継承されたことが思い起こされる。西アフリカにおいても周辺の民族やヨーロッパ諸国との交易が行われ，キリスト教化やイスラム教化による衣文化の変化のあったことが，本書でも言及されている。が外来の衣服は，民族の存在の根元に関わる非日常の儀礼の装いに，そのままは受容されなかったという事例が多く示唆される。但し氏が直接に関心を寄せ，多くの観察を記録しておられるのは着ることではなく，織機と織技術の解析を通して「作る」技術を明らかにすることであった。

原始手織機（第4章）と足踏み式機が幅広

い地域の観察によって報告されている（5章・6章）。氏は各織機形態のバリエーションの比較と地域的分布に注目して，織機と織り技術の分類と系譜・伝搬経路の整理を試みられる。が，織機と織技術そのものの類型化は極めて困難なことが示唆される。と同時に興味深いのは，ここで氏が織り手の性差によって異なる織機の種類の相違と，織布時における織り手の姿勢のバリエーションに注目されていることである。

西アフリカでは男性が織師集団を構成することが原則である。随所でこの点を指摘される本書の記述は，筆者にとって新鮮な発見であった。さらにこのことが織機のバリエーションとも関わるという示唆は技術と人間との関わりを考察する上で興味深い。つまりニジェール河口森林地帯では，男性機と女性機という使い分けがあり，男性の表の技術（＝水平機）に対する女性用機（＝垂直機）の裏または内側での使用という相違があるという。日本でも専業の多くが男性によって行われ，女性は家の内側の需要に応えるという分業が見られる。が，ここではより古い，従ってより正当性を帯びた在来型の水平機は男性に使われるのだとされ，織り手が元々男性であったことが示唆される。※織布の技術が一般に女性に属するとする報告もあるが，日本でも近世初期の職人図絵のなかに男性の登場する場面があり，織布とジェンダーとの関わりについては通時的にも共時的にも再検討される必要があろう。

多田道太郎はかつてデズモンド・モリス〈マンウォッチング〉に触発されて，日本人の独自なしぐさにしゃがむ姿勢があると指摘した。多田は，しゃがむ姿勢は日本人にとって「アアシンド」と一休みするときの伝統的姿勢であったし，排泄という最も無防備な姿勢の代表でもあり，広く見られる日本人のしぐさの典型であるとした。しゃがむことが日本文化の在り方と深く結びついた基本的姿勢のひとつであるというのである。著者は古代エジプトの壁画の観察で不自然と想われた姿勢を西アフリカの現在の織り師が織る姿のなかに，発見され，民族の独自の作業姿勢ということに注目された。技術の系譜や類型を読みとるうえで，作業姿勢から有効な示唆が与えられるとすることも興味深いことながら，作業姿勢が生活全般の中で民族の文化の深いところに連なるかも知れないと想像すると，筆者にはさらに興味がかき立てられた。

かつて日本でも大衆の衣服はほとんどが自給自足であった。生産し，管理し，着ることがそのまま毎日の生活となるような人間と衣服とのかかわりは，今やほとんど忘れ去られようとしている。が，記憶の底にある自給の体験に何かしら惹かれてしまうのは何故だろうか。便利でスピーディ，あふれるばかりの物量の世界に生きる現代のわれわれにとって，工場生産のモノは人間とは異次元の豊かさを形成してしまったようにも思われる。そして現代人は，『青い鳥』（メーテルリンク）のなかでチルチル・ミチルが夢の中のお菓子に惹き寄せられて現実を見失いそうになったように，商品をひたすら消費することによって幸せに近づこうとするかのようだ。日本における現代のモノの氾濫が何を意味するかはしばらく措くとして，このような状況下で今，人間とモノとのナマな関係のあり方を実感できる何かが改めて問われているのではなかろうか。「栄えある埋葬用の装束」であるアフリカの布には，一つの解答が示唆されるように思う。西アフリカの人々は機械生産の布によってこの装束を取り替えようとはしないのである。死者を埋葬することが現世の人間精神の安寧に結びつき，死者を装う衣服は現世の人間の幸せと分かちがたく結びつく。著者もい

たるところで「本来，防寒防暑のためには着る必要のないアフリカの布」の用途が埋葬用であり，特定の人々の威信のための着衣であると指摘される。

布というモノやその製作技術を検討する意味は，それらを基点として人間にとっての切実な価値や意味，布の存在と必然的に重なってしまう生活や文化の在り方を読み解こうとすることにあると筆者は考えている。いいかえればモノや技術がそれ自体において指し示す，日々の生活の希望や葛藤を読み取ること，この点を本書にも期待した。著者の織り手への関心や織布の用途への言及にはこの点について多くの示唆があるが，織機そのものや技術自体からそういったことを読み解く方法と相応の結論を得ることは手ごわい課題であることが改めて示唆された。

作る立場や視座から「布」というものを検討するには，まず原料を確かめることに始まって，製織を終えるまでのプロセス，とりわけ道具や織機の特徴を見極めることだとする著者の立場と信念は敬服に値する。4章・5章・6章では，西部・西部中央アフリカにわたる織機と織りの技術の観察結果が，本書の中核的な内容として構成される。氏の本領は個々の技術の説明にあるが，それのみに留まらず，主に文献を渉猟することによって織機や技術の系譜とそれらの伝播の問題に意欲的に視野を広げておられる。実作家としての氏の面目が発揮されたものであろう，筆者には製作プロセスの技法を表現される文章にもっとも躍動感が感じられた。

ところで氏は，製作に絡む周辺の事情について必ずしも系統的に取り上げられたわけではない。が，民族誌や先行研究の渉猟と氏の見聞に応じて〈布と社会関係〉が至るところで言及されており，筆者にはむしろこのことに興味が持てた。織布に絡む多様な「社会的背景」や担い手の問題や「布」の使い方が，氏の記述の端々から奔出する。重ねていえば，社会的関係が織ることの背景になっているという位置づけの仕方に，氏の視点が示唆される。一見煩雑な印象を招きかねない民族誌と先行研究の引用によって，氏は織るという行為がもつ意味について省察するに至る。

モノを制作することは技術をとおして文化を再現することである。氏の作るという基本的な視座から，布を通して西部・西部中央アフリカの多様な生活と文化が雄弁に展望されている。